2023年3月12日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№11)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　門脇陽子長老

開 会 招 詞　ヨハネによる福音書4章23－24節

＊ 賛 美 歌　１２:１（ソングシート）

1. 聖なる、聖なる、聖なるかな、三つにいまして　一つなる　神の御名をば　あさまだき　おきいでてこそ　ほめまつれ。アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　１２：２（ソングシート）

2. 聖なる、聖なる、聖なるかな、み手のわざなる　ものみなは、三つにいまして　一つなる　神の大(おお)御名(みな) ほめ奉(まつ)‿らん。アー‿メン

公 同 の 祈 祷　5　使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。　アーメン。

献　　金　　（黒）教会活動（赤）沖縄伝道　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　詩編126編1－6節（旧約聖書971頁）

ヨハネ4 章31－38節（新約聖書170頁）

説　教・祈　祷　「一緒に喜ぶ」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　３３:１，４

1. 昔主イエスの　播きたまいしいとも小さき　生命のたね　芽生え育ちて　地のはてまで　その枝を張る　樹とはなりぬ

2. 父なる神よ、み名によりて　世界の民を　ひとつとなし、地をばあまねく　み国とする　みちかいをとく　はたしたまえ。アーメン

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にます我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６５

父、み子、みたまの おおみかみに、ときわにたえせず みさかえあれ。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　（黙祷）

報　　告 司会門脇献一長老・受付古澤兵庫長老（次週：門脇陽子・門脇献一長老）

本日　受付　１階：加藤良明・那珂信之執事　２階：星野房子執事　／ZOOMホスト・録音：門脇光生

次週　受付　１階：若月学・加藤良明執事　２階：古澤迪子執事 ／ZOOMホスト・録音：雨宮信

ヨハネ4：31－38　「一緒に喜ぶ」

実りはすでに

見ての通りですが、今日の話は前後に続いていまして、結論部分は一つ後の39節以下です。そこでとても大切な言葉、すなわち「分かった」という言葉が語られています。サマリアの町の人たちが、出かけて行って、イエス様の話をよく聞いて確かめて、ああよく分かった、イエス様は「世の救い主だとわかった」と言っているところです。これがある意味ではゴールです。ほかでもなく、わたしたちが教会で信じているその中身を突き詰めますと、この一言になります。そして、このところで「刈入れ」という言葉で表しているのもこのことです。それは言い換えますと、イエス様と出会って、イエス様がどのような方かを正しく理解した、ということです。それがもうすでにこのところで起きている、大変うれしいことが今もう起きている、その事実をイエス様ご自身が語っておられるのが今日の所です。

イエスとサマリアの女

それで、このところの話のきっかけは、先ほどもお話ししましたようにかなり前から続いていまして、しばらくエルサレムとその周辺で活動をしておりましたイエス様たちが、だんだんファリサイ派と呼ばれる人たちに目を付けられるようになり、それを避けるためにガリラヤに戻ろうとした、ということころから始まっていました。少々急いでいたようで、普段イスラエルの人たちが通るのを避けていたサマリア地方を通って、シカルという町のそばの井戸端に来てや住んでいると一人の女が水を汲みにきたのでした。そこでイエス様は、その女に「水を飲ませてください」と声をかけます。この女は二重の意味で驚きます。一つは、普段完全無視が当たり前のイスラエル人であるイエス様がサマリア人である自分に声をかけたこと、もう一つは、そもそも、この時代、聖書の教師は、イエス様もまたそのような立場でしたから、なるべく女性には声をかけない、というのが常識があったからでした。しかし、イエス様はご自身から声をかけて、彼女に「生きた水をあげる」と言います。ところがこの女性は、その意味を取り違えて、神秘的な湧水でも、もらえるのだろうか、と怪しんでしまいます。

サマリアの女の求め

この誤解を解くために、イエス様は話題を変えて、彼女に夫を連れてくるようにと言います。ところがこの女性は、五回結婚し、また離婚をして、今はまたほかの男性と暮らしている状態でした。そこで夫はありませんと言いますと、イエス様は、知らないはずの彼女の生活をすべて言い当ててしまいます。驚いた女性は、しかし、そこで、自分の生活のことではなく、むしろ、本物の礼拝と何か、という信仰の問題、それも核心に迫ることを尋ねています。その点で、この女性は、ただ世俗のことだけを考えていたのではないようです。或いは、結婚と離婚を繰り返すような生活の中で、本当に自分を生き生きとさせるものはないのだろうか、と必死で求めていたのかもしれません。これに続いてイエス様が霊と真理をもって礼拝をする時が来ている、と語りますと、自分はメシアが来ることを知っている、メシアに期待している、と言っています。このように彼女の中には、幼いころから聞いてきた聖書の言葉が、なおしっかりと生き続けていたことがわかります。

サマリアの女の新しい出会い

このようにメシアについて語る彼女に対して、イエス様は、「それは私だ」とはっきりと宣言します。そこで彼女は、衝撃を受けたようです。彼女がこの時、イエス様が語られた言葉のすべてを完全に理解したのかどうかはわかりません。しかし、間違いなく彼女はイエス様と真正面から出会いました。そして、その驚きをもって、町に向かって走っていきました。それは、町の人たちにこの出会いを、メシアとの出会いを知らせるためでした。このようにして、イエス様は、あっという間に、救いの種をこの女性の中にまくことをされました。そして実は今日の説教の一つのテーマは、このことです。イエス様は、すでに、そしていつも、今このように聖書を読んでいるこの時でも、あっという間に言葉によって救いの種をまいてくださる、それは今も同じだ、ということです。

弟子たちの誤解

話を元に戻しまして、サマリアの女性が驚いて町に帰っていったあと入れ替わるように、弟子たちが買い物を済ませて町から帰ってきます。そして、イエス様に向かって、先生食事をとって下さい、とい

うところから今日の聖書が始まっています。ところが、イエス様は、弟子たちの差し出した食事に手を付けず、「わたしにはあなた方の知らない食べ物がある」と言われます（32節）。ここでもサマリアの女と同様に、弟子たちもまた、このイエス様の言葉の意味を取り違えています。「誰かがイエス様に食べ物を持ってきたのだろうか」と互いに議論をしたと続いています（33節）。このようなところを読みます時に注意したいのは、先ほどの「命の水」もそうですが、一つの言葉で、全く別の物事を現わしているという事実です。この場合もやはり「あなた方の知らない食べ物」は、当然ですが全く別の意味を持っています。そこでイエス様が、ご自身の言われた「食べ物」がなんであるのかを語り始められるのが、34節です。

別の食べ物－ともに喜ぶ

「私の食べ物とは、私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」。私をお遣わしになった方、とはもちろん神様です。神様の御心はすでに語られていました。ヨハネでは有名な3：16にありますように「独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得る」ことです。ほかでもない私たちが、神様によって命を得る、生き生きと生きる、このことを成し遂げることこそが、私の食べ物だ、そのようにして一人の人が救われることが、私を生き生きとさせ、力づけるのだ、とイエス様ご自身が言われています。しかし、そのような神様の御心は、**イエス様だけで成し遂げられるのではない、ということが、このところのもう一つ大切なテーマです**。そして、実はこのところの、特に35節以下は、**イエス様による弟子たちへの、そして私たちへの招きの言葉です。まずは、35節で、すでに刈入れが始まっている、ということが言われています。**

刈入れの譬え

それで、早速35節の借り入れのたとえを見ていきますが、これもまた、麦の刈り入れは比ゆ的な言い方です。当時は農業の暦が社会の中心にありましたから、このような言い方がピンときたようです。当然ですが、麦であれば、春先に土を耕して、種を蒔いて、それを初夏に刈り入れる、それからもう一度、種を蒔いて秋にも刈り入れる、というようなサイクルがあります。当然ながら、種を蒔いたら、まだ四か月ある、ということになります。しかし、神の国の刈り入れ、み言葉の刈り入れは、そうではない、というのです。「目をあげて畑を見るがいい」とイエス様は言われます。しっかりと見ると、見えてくるものがある、というのです。では、この場合にしっかり見るべき、色づいている畑はどこにあるのでしょうか。その関連で35節の最後に短く「**既に**」とあるのは、大切です。いつかではないのです。今すでにある事実に目を向けよう、このようにイエス様は言われます。そして、今すでにある事実を見るなら見えてくるものがあるというのです。それが、その次の36節です。

今すでに実りが

36節の前半はこうです。「刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている」。イエス様の言葉を受け止めた人には実りがあるといいます。み言葉そのものにすでに力があるのです。人の中にまかれたみ言葉は、実りをもたらすのです。それは具体的には、先ほどイエス様の言葉を聞いた、あのサマリアの女です。或いは彼女から話を聞いたサマリアの町の人たち、あるいは12弟子たちかもしれませんし、こうしてイエス様のみ言葉を聞いている私たちもそうかもしれません。刈入れられる実りは人間です。私たちお互い同士、そして多くの人たちです。そしてその実りを味わって、種を蒔く人、すなわち、イエス様も、そして、そのイエス様の実りを見つけ出す私たち、即ち刈り取る人も、一緒になって喜ぶ。そのようにして神様の御心が成し遂げられていくということを言うのが36節の後半です。私たちは、このようなイエス様と一緒に喜ぶ、ありかたへと招かれています。

蒔くものとしてのイエス

それで、改めて確認しますと、わたしたち自身は種を蒔く人ではありません。それをはっきりと語っておりますのが、37，38節です。37節で言われているのは、ここでも蒔くものと、刈り取るものは別

だ、という事実です。いやまて、詩編（126：5）にあるように、苦労して種を蒔いて、それが実ったら喜んで刈り取るのではないか、ということも出来るかもしれません。実際には伝道の労苦というものは確かにあります。しかし、ここでは、まず最初に苦労して種を蒔くのはイエス様だと言われているのです。イエス様が、あの十字架に至るまで、忠実に、神様の御心に従いとおす、という涙の種まきをして下さることを前提として、この刈り取りは成り立っています。そして、わたしたちは、このイエス様がまいてくださった命を刈り取るのです。私たちは、38節にあるように、自分では労苦しなかったものを刈り取るのです。まさに、他の人が労苦し、あなた方はその労苦の実りに与るのです。

刈入れ人はあなた

それは38節前半に「あなた方が自分では労苦しなかったものを刈り入れれるために、わたしはあなた方を遣わした」。とある通りです。あなた方とは、この場合には12弟子です。しかし、それは各時代に教会に集まっている人、一人一人も含まれるずです。その一人一人をイエス様は、刈入れ人として派遣している、というのです。すでにイエス様が種を蒔いてくださっている実りを刈り入れるためです。イエス様が言われるように、畑はすでに色づいているのです。イエス様の言葉の種がまかれるときには、全く待つことなく、すでにその場で畑が色づき、収穫が期待できるということを他でもないイエス様ご自身が言われているのです。そうであるからこそ、このところの36節以下の言葉は成り立っていくのです。

一緒に喜ぶ

　もう一度36節の言葉を読みます。「こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである」イエス様と私たちで一緒に働いて、一緒に喜ぼう、という招きです。種まきをして、働いてくださるイエス様と、そのようにイエス様が働いてくださっ民紀を刈り取る私たち、この両方が一緒に恵みに与る、なんだか申し訳ないような気もしますが、全くそのような濡れ手で粟のような関係こそが、実は教会の置かれたイエス様との関係だ、ということをこのところは示しています。この事は、地上に教会がある限り、これからもずっと続いていきます。イエス様の言葉の種がイエス様ご自身によって蒔かれ続ける限り、そこには、刈り入れる人が、永遠の命に至る実を集めることが続いていきます。そのようにして、わたしたちは、種を蒔くものであるイエス様と一緒になって、喜びの礼拝をささげ続けていくのです。

祈り

　父なる神さま、み名を賛美します。あなたは私たちを愛し、わたしたちが命を得るために、御子を遣わしてくださいました。そればかりでなく、御子の語られる言葉によって、あなたを見出す恵みを得、永遠の命に生かしてくださいます。すでに畑は色づいています。わたしたちが、この実りを刈り取り、イエス様とともに喜ぶ礼拝を、繰り返し、飽くことなく続けていけますように。この週の歩みにもこの実りの喜びを与え続けてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。